

## 超人的力としての言語と、境界人としての指導者の 権威——キプシギス族の行政首長再考

小 馬

徹\*

### 1. 目的と方法

ヨーロッパ諸国による植民地経営は、直接統治と間接統治とに大別して考えられるのが常である。イギリスの統治に代表される間接統治は、伝統的にかなり強力な中央集権的政治機構をもっていた人々の間では、概して有効だったものの、伝統的に中央集権的な機構をもっていなかった人々の間では必ずしも成功せず、植民地政府によって新たに導入された行政首長制は有効に機能しなかった、と言われている。この見解は、歴史学者、経済史学者、政治学者等によって広く支持され、政治人類学の分野でも、繰り返し表明されてきた。ここでは、2人の人類学者の所説を引用する。

イギリスの間接統治の行政々策は、外国を統治するのに、経済的で思いやりのあるやり方に行ったため、原住民の政治制度を保存しようとして取られたものだが、それが完全に成功したのは、原住民の支配者が、すでに相当の強制力をもっていた国々だけに限られていた。その他の所で民衆の信頼をうけているように見えたため、その職能を認められた首長たちは、上は植民地政府、下は民衆の間にはさまって粉々にされた。<sup>1)</sup>

現地に首長がない場合、西洋の政府は、親族集団や宗教的集会に対する忠誠心をつかむことができないので、活動させる機構をもたないわけである。そこで、政府が、現住民の首長を任命すると、こういう首長は、民衆の合意によって拘束されることがなく、自分の地位を悪用して、仲間から搾取するような人間になったことが多い。そのうえ、こういう首長は、現地に

おける互いに交叉した連結関係から浮上っており、植民地政府の手先とみなされた。一九二九年のイボ族——そしておそらく現在のキクユ族〔東アフリカのケニアにおける農耕民〕——の場合のように、こういう首長たちこそ、最初の襲撃目標になったのである。<sup>2)</sup>

植民地化された当時、ケニアのキプシギス族の政治構造は、キクユ族と同様、年齢組体系が個人の社会的な地位と役割とそれに基づく社会行為を決定する基本的な準拠枠となっていた。だがキクユ族では氏族が固有の領土をもっていたのに対して、キプシギス族では多数の小さな氏族が分立して、それぞれの氏族のメンバーは部族の領土全体に拡散しており、さまざまな氏族の人々が自由に入り混って住んでいた。また、同じく年齢組体系を重要な社会統治の原理とするスーダンのヌア族では、その政治構造には、仮構的な父系系譜上の分節の融合と分裂に基づく、リニージの分節化原理が見出せるが、<sup>3)</sup> キプシギス族の政治構造には、部族全体を貫くほどのリニージ分節は見られず、人々は、多くの氏族のうちでもごく親しい隣人の氏族をいくつか聞き知っているだけであった。このように、キプシギス族の社会は中央集権的な社会ではなく、他方、本来の意味での分節社会でもなく、年齢組体系が社会統合の中心的な核となっており、部族の政治構造全体に占めるその重要さは、キクユ族はもとより、ヌア族と比べてもはるかに大きかった。

キプシギス族は、戦闘、近隣集団の長老会議と紛争の調停、イニシエーション諸儀礼などの特定の状況に限って非日常的な権威をもついくつかのタイプの指導者を、それらの役職を担当すべく慣習法が規定している年齢階梯にある年齢組から選任した。だが、イギリス植民地政府が行政首長制

\*大分大学教育学部

を導入したときに、キプシギス族が候補者として自ら推薦したのはこれらの伝統的な指導者ではなく、後述するように、もっと「重要でない」人々であったと言われている。

先に触れた、間接統治の成功・不成功に関する一般的な見解からすれば、きわめて悲観的な状況にあったはずのキプシギス族の間で、行政首長制が比較的円滑に受け入れられ、かなり有効に機能し、やがてキプシギス族がケニアにおける近代化の「ショー・トライブ」<sup>4)</sup>とさえ見なされるようになるのである。これはいったいどのような理由によるのだろうか。

この理由を十分納得のゆくように解明するためには、キプシギス族の伝統的な政治構造とその植民地化以後の変化の実態を、綿密に、実証的に記述分析しなければならないのは言うまでもない。しかしながら、それがこの論文の直接の目的ではない。私は、ここでは、上の理由の一半を、伝統的であれ近代적であれ、キプシギス族の指導者たちがもっている権威のあり方の特性である境界性に求め、それをシンボリズムの側面から、「超人的な力としての言葉」と言う観念とのかかわりにおいて論究してみたいのである。それによって、非中央集権的かつ非分節的なキプシギス族の社会における指導者とその権威の構造を一層明確に把握することが本論の目的である。

すなわち、私の論点は次のように要約できよう。

- 1) キプシギス族の間で行政首長に任命された人々は、本当に取るに足りない人々だったのだろうか。またはたして、彼等は「民衆の合意によって拘束されることがなく」、キプシギス族の政治構造において、「互いに交差した連結関係から浮き上っていた」のであろうか。
- 2) 逆に、伝統的な指導者たちは部族の中心的価値の体現者として、植民地期の行政首長たちとは対照的に、安定した権威と尊敬を得ていたのだろうか。
- 3) むしろ、行政首長と伝統的な指導者たちとの間に、部族の政治構造上の位置に関して、本質的な共通性が存在するのではあるまいか。

- 4) その共通性は、言葉という超人的な力の操作者としての、社会的正義に関する両義性と、社会的存在としての境界性に根差すものではないだろうか。

以下、この方向に沿って、筆者自身の現地調査の資料を中心にし、他の研究者の論文を参考にして論究する。<sup>5)</sup>

## 2. キプシギス族——歴史的背景と政治構造の概略

キプシギス族は、パラ＝ナイル語系に属するカレンジン諸族（人口約165万人、1979年）中最大の部族で、人口は約60万人に達するものと推定される。<sup>6)</sup> ケニアのリフト・バレー州と、西部州のエルゴン山麓に住むカレンジン諸族の中でも最も南に位置する部族で、リフト・バレー州のケリチョ県を中心に、ほぼ標高1,600～2,100 m程の高原地帯に住んでいる。植民地化以前は、シコクビエやモロコシの粗放な移動耕作も行なう移動牧畜民として、牛、山羊、羊を飼養したが、植民地化に伴い定住化した。現在では、生計の半ばをトウモロコシや茶、除虫菊などの栽培に依存しているが、牛牧民を強く自認し、牛複合文化を維持している。<sup>7)</sup>

おそらく、17世紀初めにバリンゴ湖あたりから南下し、17世紀中葉に現住地ケリチョ県の北端あたりに達し、しばらくマウの竹林地帯に潜伏して生活した後、18世紀初頭に再び南下を始め、バントゥ語系のグシイ族、ナイル語系のルオ族、パラ＝ナイル語系のマサイ族と小規模の戦闘を繰り返しながら、19世紀末までにはほぼ現住地にあたる地域を占有し、この過程で降伏したグシイ族を編入したり、先住の狩猟採集民であるンドロボ族の小集団を吸収しながら拡大を続け、人口も数万人に達していたと考えられる。

次に、この論文に関係する範囲での政治構造の概略をまず述べておこう。植民地化前後のキプシギス族の日常生活の基盤は、現在と同様に、諸々の氏族の人々からなる、コクウェットと呼ばれる近隣組織だった。近隣組織は10数戸から100戸程の小家族で構成され、集落を作らず、家屋は各

戸が占有する農地の中に建てられた。当時、近隣組織は、今日とは異なり、部族の広い領土に点々と散在していた。

年齢組は10年から20年程の間隔で形成され、それぞれが固定した特定の名称をもち、その名称は循環して8組目ごとに再び現われる。年齢階梯は、少年、戦士、長老に分かれる。少年階梯の者は、まだ年齢組に加入しておらず、新しく形成された年齢組が戦士階梯を占め、退役した年齢組は、すべてが長老階梯に属する。戦士階梯にある年齢組の主要な社会的役割は、近隣組織からかなり離れた所にある部族共有の放牧地に作られた近隣組織ごとの牛囲いに寝泊りして、近隣組織の牛を飼養すること、近隣組織の人々やその財産を野獣や敵の襲撃から守ること、それに、他部族を襲撃して家畜を略奪するとともに領土を拡大することであった。女たちは近隣組織にあって農耕し、山羊や羊は、子供たちが近隣組織の領域の集辺で放牧した。戦士たちの住む牛囲いから、牛の乳や血を毎日もち帰るのは少女たちの仕事だった。

戦士たちは、各近隣組織ごとに小隊を作り、「戦士のリーダー」(*kiptaiyatap murenik*)と呼ばれる指導者の指揮下におかれた。この近隣組織ごとの小隊が防衛の単位であり、防衛についてはこれ以上の大きな組織化はみられなかった。他部族を襲撃する場合には、はるかに大きな規模の組織化がみられた。近接するいくつかの近隣組織の小隊が連合して中隊を作り、この中隊は、「軍団のリーダー」(*kiptaiyatap boriosiek*)が指揮をとった。軍団のリーダーの名は広く部族全体に知られ、中隊は彼の名を冠して「誰某の中隊」と呼ばれた。

こうした中隊は、キプシギス族の当時の領土を地形的に三分する「大地域」(*emet*)ごとに、「軍団の大リーダー」(*kiptaiyat neo nebo boriosiek*)の下に統轄されていた。三つの大地域の軍団の大リーダー等に号令を発する、より高位の戦闘のリーダーは、通常は存在しなかった。

戦士たちは、主として隊列の前衛と後衛を勤める部隊(*ng'oimetiet*と*oldimdo*)を構成した。隊列の中程に位置し、略奪を専門とする部隊

(*birtich*)には、すでに長老階梯に退いた年齢組の者や、大きな戦役では年長の少年達も参加した。

「戦士のリーダー」には戦士階梯にある年齢組の者が選ばれることも稀にはあったけれども、多くは長老階梯に属する者が選ばれた。「軍団のリーダー」と「軍団の大リーダー」には、常に長老階梯にある人物が選任された。軍団の大リーダーは、身体が衰えて参戦できなくなると、半ば自動的に「調停役」または「助言的裁定者」(*kirwo-gindet*)<sup>8)</sup>と訳せる役職につくのが普通だった。助言的裁定者は、各レベルの戦闘のリーダーたちとは異なり、任務をその範囲で遂行すべき特定の地域をもたず、求められて各地の近隣組織を訪れ、その長老会議の席で調停役を果たすのが彼の主要な政治的機能だった。

各レベルの戦闘のリーダーは、戦時には、戦士に体罰を加えることさえできるほどの強力な統制力を振ったけれども、それは厳密に戦時に限定されていた。日常生活では、今日と同様に、近隣組織が基本的な社会単位であり、成人男子全員で構成される長老会議をもち、部族の法的機能を代表した。長老会議では、近隣組織の運営、ある家族の不幸の原因、災害の原因の究明とその対策など、あらゆる事柄が論じられたが、いわば近隣裁判の性格も併せもっており、個人間や家族間の紛争の調停は、きわめて重要な機能だった。「戦士のリーダー」は、老齢のために参戦できなくなると、退いて、「近隣組織のリーダー」(*kiptaiyatap kokwet*)または「近隣組織の長老」(*boiyotap kokwet*)と呼ばれる役職につくことが多かった。近隣組織の長老たちは、紛争を長老会議にかけ以前に調停に努め、示談に持ち込むことに腐心し、長い時間を費す。彼等は、長老会議でも、進行役であるとともに調停者である。キプシギス族の長老会議における裁判は、係争が個人間または家族間の係争に留まり、ほとんど氏族間の力学的関係が介在しない点を大きな特徴とする。これは、氏族が小さく分離し、広大な領域に拡散して住んでおり、氏族ではなく近隣組織が人々の日常的協働の実質的な基盤になっているためであると

言える。長老会議で紛糾が続いたり、二つ以上の近隣組織が紛争にかかわりをもった場合には、関係する近隣組織の外部から、一人または複数の助言的裁定者が長老会議に招かれた。長老会議の裁定が下ると、犠牲獣の共食またはビールの共飲が行なわれ、以後一切異議申し立ては許されず、あえてこの掟に反した者は、「本性にもとる行為」をする者と見なされ、まるで妖術者のように忌み嫌われた。

キプシギス族の各種のリーダーたちには、特定の役職と役職名があったけれども、彼等の権威は生活の特定の場面に限られていて、日常生活全般に及ぶものではなかった。彼等は、ほとんど報酬を受けず、服装にも、財産にも、他の人々と大きな差違は認められなかった。J.G. ペリスティアニによると、他の人々とかなり明確に異なる表徴をもっていた唯一の存在は、「助言的裁定者」である。彼は手にワイルデビーストの尻尾 (*saruriat*) で作った払子 (*saruriat*) をもっていたので、別称を「払子持ち」(*kipsaruriat*) とも呼んだと言う。<sup>9)</sup> しかし、これが実際であったとしても、必ずしも重大な差違であるとは言えない。<sup>10)</sup>

### 3. 超人的な力としての言葉

キプシギス族の戦闘のリーダーは、一切、門地や家柄によらず、個人の能力と業績に基づいて選ばれた。リーダーたる資質は、勇猛であることと、能弁であることだった。中でも、人々を説得し、自らの意見に従わせる能力こそが、リーダーたるに最も大切な資質だったのである。このような考え方の背景には、言葉 (*ng'alek*) を、それを操る人物を超えた独自の論理をそなえた力と見る、キプシギス族の言語観がある。そこで、キプシギス族の指導者の属性を理解するために、まず、彼等の言語観を概観しておく必要がある。

キプシギス族の世界観では、神、祖霊、妖術を初めとして、さまざまな超人的な力の実在が信じられている。<sup>11)</sup> 言葉もその一つであり、呪詛、「宣誓」、祝福、祈願などの行為の背景で働いている力である。

E. デュルクームによって初めて提唱されて以来、

人類学で広く支持されている考え方に従えば、言葉とは、個人に所与のものとして先行し、個人の心理に外在し、個人に重くのしかかって拘束し、それ自体を発現させるべく個人を強制する集合表徴の代表的なものであり、それ故に、個人を超えて存在し、生物学的な種としてのヒトである個人を社会的存在としての人間たらしめる超人的な力であると言えることができる。しかし、今私がここで問題にしているのは、調査者や研究者の側から見た、言語の分析的な超人的側面ではない。今ここで重要なのは、キプシギス族自身が、言葉を、それを使用する個人を超越した独自の力として認めており、また言葉がその発話者や発話が志向された対象を、彼等の意志を超えて支配する力であるとする観念をもっていると言う事実である。

まず、キプシギス族は、言葉を操る能力が人間に特有のものであり、この能力こそが人間を人間たらしめると考えている。この能力は魂の観念に結びついている。人間も動物も等しく生命をもっているけれども、動物は魂をもたない。動物が言葉を用いないこと、就中、名前でお互い呼び合わないことがその具体的な証拠だと考えられている。彼等は、魂は肉体の死によって肉体を離れて祖霊になるが、祖霊はやがて再び同性の子孫である新生児の肉体に入り込んで、その子供の魂となるという観念をもっている。この観念は、新生児に入り込んだと同定された祖霊の名前がその新生児に与えられる慣行と並行関係にある。すなわち、新生児の誕生と同時に、家族の女性たちが、祖先の名前を次々に呼びあげていく。赤ん坊の最初のくしゃみは、入り込んだ祖霊からの応答とされ、そのときに名を呼ばれていた祖霊の名前が新生児の「祖霊名」になる。この赤ん坊は、人々から、その祖霊名か、その祖霊との相互関係にふさわしい呼称で、「オトウサン」、「オカアサン」などと呼ばれる。この慣行の社会的機能が、祖霊の存在が子孫たちの記憶の中に生き続けていることを常に示すことによって、気紛れに子孫を不幸に陥れては彼等の関心を引こうとする非道德的な存在である祖霊を慰撫し、さらには、常に祖先に言及することで家族や氏族の統合と団結を強化することにあ



ることは、すでに他で述べた。<sup>12)</sup> 言葉は、このようにヒトを人間たらしめる力であると同時に、この世に生きている世代とすでにこの世を去って祖霊界にある世代とを交流させる力とも考えられているのである。

強力な超人的な力であるが故に、言葉は畏怖されてもいる。言葉は、一旦人間の口から発せられると、発せられた形式に従って、発話者の意志を超えて、自らその内容を実現させてしまうから、言葉は常に適切な仕方でも慎重に用いられなければならない。その用い方を誤った者は、人々から蔑まれ、恐れられ、憎まれることになる。

謎々遊び (*tang'ochik*) は、言葉を弄ぶ遊びだが、成人した者は、けっして謎々を口にしてはならない。大人が謎々を口にすることは、人間のカテゴリーを混乱させる、尋常でない、危険な行為である。成人後も謎々を口にしたり、謎々に類する論理を弄ぶ者、適切な口の利き方をわきまえない者は、「謎々者」(*kiptang'oian*) と呼ばれ、人々からうとまれる。児童に類する行為をする者もまた「謎々者」として分類される。<sup>13)</sup>

歌も、子供と大人とでは対照的なマナーで歌われなければならない。子供は一番高い声で、成人は押し殺した最も低い声で歌われなければならない。

たとえ子供の無邪気な行為であっても、発話の適切な形式を守らなければ、恐ろしい結果を招いてしまう。いく人もの子供たちに恵まれながら、息子が娘か、どちらか一方の性の子供たちしか育たず、もう一方の性の子供が生まれても次々に死んでしまうような人物の場合、その人物が幼いときに、「大人になっても、娘(息子)なんかいないやい」などと小生意気なことを言ったことが、まず最初に、その不幸の原因として疑われ、確認の労がとられるのである。子供が大人びた小生意気な口の利き方をするのは、人間のカテゴリーを混乱させる、言葉への不適切な働きかけ方である。<sup>14)</sup>

言葉は、単に発せられた内容を実現するばかりでなく、ある特定の発話形式をもってすれば、発話者が発話した心理の底に抱いている——あるいは、発話者自身が、しかとそれと気付いていない

——秘かな破壊的な願望の内容すら実現してしまうと考えられている。他人の子供や牛や作物の美しさや、大きさ、豊富さに言及することや、病人に回復を請け合うのは忌むべき行為だ。そうするのは、秘かな嫉妬の現われであり、言及された子供、牛、病人の死や作物の枯死を引き起さずにはすまないとされる。この行為はモンセットあるいはマニセットという特定のカテゴリーに分類されている。

モンセットは、発話の別の形式である祝福との間にある種の相補性をもっている。祝福は、まだ実現していないか、実現しつつある状態に言及して、それを実現させようとする発話形式である。一方、モンセットは実現しつつあるか、すでに(一部)実現している状態に言及して、それを無に帰す発話形式である。<sup>15)</sup>

言葉のもつ力の社会的な両義性をよく表わしているのが *kat* または *gat* という概念だ。<sup>16)</sup> 長島信弘によれば「*gat* という語根」は、少なくともいくつかのパラ=ナイル語系の言語に共通する。長島は、自らの現地調査の資料に基づいて、ウガンダの北テソ族とケニアの南テソ族を比較して、次のような興味深い見解を示している。

…ケニアでは「祝福」を意味する *akigat* が、ウガンダではまさに「呪詛」の意味で用いられているのである。したがって、この *gat* という語根の理解は「呪詛」と「祝福」という対立に発展する以前の、「神秘力の正当な行使」といった意味が含まれているのかも知れない。たとえば、言語的に同系のウガンダのカリモジョン族には *ekegatan* ということばがあり、ダイソン=ハドソンはこれを「祈りのリーダー」*prayer leader* と訳している。このリーダーとは、長老たちが集合的に「祝福」を与えたり「呪詛」をかけたりするときのリーダーである。<sup>17)</sup>

テソ語と同じくパラ=ナイル語に属するキブシギス語では、*kat* は他動詞であり、その意味内容は「祝福」(*kaberuret*) にも「呪詛」(*chubisiet*) にも直接的には結びついていないけれども、長島

が言う「神秘力の正当な行使」に、ある側面で通じると言ってもよい。*kat* の概念は、英語の *inflict* で最も近似的に表現できそうだ。何かの負担を相手に強いるようなことだが、この動詞は「挨拶する」と言う意味で用いられる頻度が最も高い。再起代名詞を目的にとって自動詞化して *kat-ge* の形で用いれば「挨拶し合う」、「握手する」の意味になる。

ところで、キプシギス族の間では、挨拶するのは、まさにある意味で、相手に負担を強いることである。彼等の間では、挨拶は常に古い年齢組の者から始めるものであり、その逆はひどい侮辱である。古い挨拶の形式では、マサイ族と同様に、成人は少年に「スパイ!!」、少女に「タクウェニャ!!」と呼びかけ、その応答は、それぞれ、「エボ!!」、「イコ!!」にきまっていた。今日では人間のすべてのカテゴリー間で等しく「チャムゲ?」（「自分を愛しているか?」）に対して、「チャムゲ」（「自分を愛している」）と答えるのが普通である。いずれにせよ、キプシギス族の挨拶とは、年下の者が、年上の者に求められて、同意や服従を否応なく表明することだと言う一側面をもつ。見方を変えれば、挨拶とは、年長者の年少者に対する同意や服従の合法的な強制、すなわち、相対的に年長であることによって生じる「神秘力の正当な行使」であり、それは言葉を媒介として行なわれる。

離婚儀礼でも挨拶が重要な役割を果たす。今まさに別れようとしている夫婦は、握手を交しながら、互いにまるで少年と少女であるかのように、相手の幼名を添えて「スパイ!!」と「タクウェニャ!!」で呼びかけて応答を誘う。この行為は、互いが結婚できないカテゴリーの者であることを宣言し、それを相手に認めさせあうものである。

離婚儀礼での挨拶と並行するのが、夫婦の間ではけっして幼名を用いてはならないとする慣行である。万一伴侶の幼名を口にすれば、離婚儀礼における挨拶と同じく、伴侶を結婚できない相手だと宣言したことになり、発せられた言葉が別離を実現すると考えられているのである。それ故、夫婦は、伴侶の幼名と同根の語を忌み口にしない。

例えば、夫の幼名が *Kiprotich*（夕方牛が放牧から帰ったときに生まれた男の子）であれば、妻は *rot*（夕方〔牛が〕放牧から帰る）と言う動詞を忌み、*bwa*（来る）を代わりに用いる。

挨拶とは反対に、不当な立場にある者が正当な立場にある者に、寛恕を強いるために、神秘力を行使するのが「儀礼的謝罪」（*nyoetapgat*）である。<sup>18)</sup> 困窮した者が比較的豊かな家から少量の穀物や山羊か羊を一頭盗み出して消費し、すぐに儀礼的謝罪を行なえば、その所業は窃盗ではなく、一種の強いられた貸借として扱われた。娘や妻を強姦した者や、姦通した妻の父親によって儀礼的謝罪の手段に訴えられれば、こんな重大な状況でも、怒りをおさめて許さなければならない。<sup>19)</sup> さもなければ、今度は自分が社会の非難の矢面に立たされることになる。

*kat* と言う動詞から派生した次の三つの名詞を比較してみると、超人的な力である言葉に、一定の形式で働きかけて相手に負担を負わせながら同意を引き出すことを意味する *kat* の概念に纏わる両義性がよく理解できるであろう。<sup>20)</sup>

- 1) *kataleset* 狡猾な無理強い。断り切れないけれども気乗りのしない事柄の実行を相手に求めることによって、難しい立場に陥らせること。<sup>21)</sup>
- 2) *katigonet* 忠告。
- 3) *katamset*<sup>22)</sup> 偽りの告発。

多少の補足をするならば、*katigonet*（忠告）とは、「近隣組織の長老」が、紛争を長老会議に持ち出す前に、紛争当事者間の示談に持ち込もうとして行なう説得や調停をも意味している。この過程こそが、「近隣組織の長老」の調停能力の見せ所なのである。「忠告」による調停は、社会的正義と言う視点からは、「狡猾な無理強い」と一見ベクトルを逆にするように思えるけれども、場合によっては、「忠告」による調停は、当事者（の一方）にとっては、社会正義の名においてなされる「狡猾な無理強い」と考え得る性質を帯びている。

以上に概観してきたように、キプシギス族の信じるところでは、言葉は人間を超えた強力な力で

あり、発動の仕方によって善にも悪にも作用すると考えられている。だから、多弁な人物は「言葉の多い奴」と呼ばれ、うるさがられる以上に、忌み嫌われている。例えば、ピール・パーティは、責任者の監督のもとに静粛に行なわれなければならない、酔漢や騒々しい人物は会場から追放されるのが慣行である。<sup>23)</sup> 言葉の誤用や濫用は、発話者の意図を超えて、恐ろしい作用を招くおそれがあるのだから、不必要な言葉は用いるべきではない。それ故に、挨拶などで安否を尋ねられたときの応答は、「言葉がない」(“*Momi ng’ala*”)なのである。<sup>24)</sup>

#### 4. 行政首長

キプシギス族は、19世紀末から、イギリス軍と小規模の抗争を散発的に繰り返したが、1905年に、現在のキプケリオンンの町で、犬の身体を前後に両断して宣誓をするという伝統的な講和儀礼を行ない、以後完全にイギリス植民地政府の支配下におかれた。<sup>25)</sup>

当時、イギリス植民地政府が、キプシギス族についても、北ナイジェリアで成功を収めたような間接統治を行なうには、これまでに触れてきたような伝統的なリーダーを、首長やヘッドマンに任命するのが、幾分なりとも好都合だったはずである。イギリス植民地政府には、このほかに、もう一つの選択肢があった。それは、マサイ族の間に見られるようなオライボニ型で、社会の中核的機能を担う予言者とその氏族の宗教的権威を利用することである。

キプシギス族と歴史的に強固な同盟関係にあり、言語、文化、社会的にきわめて近似的なナンディ族から、19世紀末にキプチョンベルあるいは、コイレゲンという予言者が亡命して来た。彼は、ナンディ族の予言者の座を兄弟のコイタレル(別名はサモエイ)と争って破れたのだ。彼は、後に詳述するモゴリ戦役でのキプシギス族の敗戦を予言したことによって、キプシギス族の間で影響力をもつようになる。彼は、人々とは直接言葉を交さず、伝令を各地に派遣して指示を与えた。イギリス植民地政府は、予言者と彼の伝令たちの組

織を利用することもできたのだ。

植民地期初期には、予言者の権威は、キプシギス族の間にまだ完全に浸透していたわけではなかった。しかし、植民地政府は、ナンディ族が予言者を政治的統合の核として、植民地政府の支配に対して激越な組織的抵抗を繰り返していた<sup>26)</sup>ことを教訓として、キプシギス族では、予言者とその氏族を徹底して弾圧する政策をとった。

それではいったい、キプシギス族の中で、実際に最初の行政首長やヘッドマンに選ばれたのは、どのような人たちだったのだろうか。マナーズは次のように述べている。

…(ルンブワ原住民)保留地の各地で“首長たる”任務は、実際のところ、おおむね指導者を勤めた経験のない者たちの手に委ねられた。これらのあまり重要でない人物たちは、事実上、キプシギス族自身が選んだのだ。植民地の創草期には、キプシギス族がイギリス人の目を最も重要な人々の方へ向けさせない方針をとったからである。イギリス人たちが任命しようとしている者たちにいったい何が起るのか、キプシギス族にはわからなかった。だから、…それほど重要でない人物を代わりに提供することにした。…大切な指導者たちは、自分たち自身が必要なときに、助言や援助や指導を仰げるように、植民地政府の職務につけないでおくべきだと考えたのである。<sup>27)</sup>

マナーズの見方は、私自身がキプシギス族の古老たちから聞いた見解とほぼ一致している。では果たして、「あまりに重要でない者たち」とは、どのようなカテゴリーの人々だったのだろうか。古老たちによればそれは、乱暴者も含めた「謎々者」と、キプサガリンデット(*kipsagarindet*)と呼ばれるカテゴリーの人たちだった。

後に、行政首長として、南部のソト地方の人々の尊敬を集めたケンドウイワ・アラップ・バリアッチの伝記を読んでみると、若い頃には彼が手のつけられない乱暴者だったことがうかがえる。<sup>28)</sup> 彼のような「謎々者」の中で、最も悪名の高いの

は、キプラニコット（「屋根登りもん」）と仇名された男である。彼は、イニシエーション諸儀礼に伴うビール・パーティを初め、いたる所の酒席で不埒な口の利き方をしては、会場から叩き出されていた。すると、彼はその家の屋根に登って、屋根の頂に垂直に据え付けられている1メートルほどの長さの白木の杭を引き抜いてしまうのが常であった。この杭は、その家の主人とその生殖力の象徴である。その家の主人が亡くなると、忌中にこの杭が屋根から取りはずされる。<sup>29)</sup> この行為は、家の中に誰もいないことが確認された後に行なわれる。「屋根登りもん」のように、その家の主人が健在で、しかも人々が屋内でビール・パーティを楽しんでいるときにこの杭を引き抜くのははなはだしい冒瀆であり、児戯（＝「謎々」）どころか、妖術であるとさえ見なされた。キプシギス族は、この男までも行政首長に推挙したのだ。

キプサガリンデットとは、一義的には、他の部族から養取されて、キプシギス族に帰化した人物のことである。帰化人たちは、部族の慣習法上、いささかも差別を受けなかったし、社会規範としても、日常生活においてもへだてなく遇されるべきだと考えられていた。<sup>30)</sup> しかし、キプサガリンデットは、「本性にもとる行為をする」ことを意味する自動詞である *sogor-ge* から派生した語であり、きわめて不快な響きをもった単語である。「本性にもとる行為」とは、人間について言う場合は、近親相姦や、嫁の母と娘の夫を初めとする儀礼的忌避関係にある姻族間で犯された姦姦などのきわめて重大な背徳を指す。この論文では、キプサガリンデットを、便宜上、以下に「異人」と訳出しておく。

中央部に当たるブレティ地方の行政首長として長年勤め、その功績を讃え、県都ケリチョの街路にその名が記念されているアラップ・テングチャは、行政首長に任じられた「異人」の代表的な人物である。彼は、東アフリカで、一般にンドロボと呼ばれる山岳地域に住む狩猟採集民の出身であった。カレンジン諸族と同盟し、カレンジン諸語を話すンドロボ族の分派をオギエック、マサイ族と同盟してマー諸語を話す分派をオモティック

と呼ぶが、アラップ・テングチャは、もとはオギエックであったともオモティックであったとも伝えられている。彼は、キプシギス語のほかに、マー諸語の一つであるイクオベック語を話すことができた。

アラップ・テングチャは、そればかりでなく、イギリス人の農場でしばらく働いた経験から、英語も話すことができた。初期に行政首長に選ばれた人々の中には、テングチャのように白人のもとで働いた経験を通じて、英語を解するようになった者が少なからず含まれていた。彼等が選ばれた理由は、植民地政府の意志を仲介する能力をもっていたことにもよるが、それ以上に、彼等が「異人」だったからである。すなわち、「異人」とは帰化人ばかりでなく、キプシギス族の習慣を捨てて他部族の間で暮す者や、部族を裏切ったと見なされた者にも適用される概念なのである。

初期の行政首長に任命されたもう一つのタイプの人々は、予言者の伝令たちであった。自らも予言能力をもち、実際キプシギス族の間で最も卓越した予言を行なった人物として今も名声を保っているアラップ・ムゲニヤ、高名な「軍団のリーダー」でもあったアラップ・チェリロも、伝令から行政首長に選ばれた。予言者は、戦場で勝利を収めるために、またたくさんの略奪物を得るために、戦前に先立って人々が頼らざるを得ない存在と信じられていたが、他方、気象を自在に操っては災害や疫病をもたらし、それを鎮めては報酬としてキプシギス族の財産を収奪する、恐るべき妖術者とも見なされ、畏怖され、恨まれてもいた。伝令たちは、言葉を操る強力な専門家でありながら人々とは口を利かない予言者と、一般の人々との仲介者であり、社会的に「境界人」だったのである。

上記のような人たちが、最初の行政首長に選ばれた結果、キプシギス族では、植民地期初期には、伝統的な権威と行政首長制が併存した。だがやがて、戦闘のリーダーたちを勤めた者の中で英語を解する者が多く行政首長を勤めるようになる。また、退職した行政首長が、伝統的権威体系の「助言的裁定者」になることも少なくなかった。後者の典型的な例として記録されているのが、社会人

類学者であるペリスティアニの最良のインフォマントであった、北ベルグート地方のキプシオンゴ・アラップ・テルである。

ここで注目しておきたいのは、行政首長が、伝統的な助言的裁定者を指す語であったキルオギンデット (*kirwogindet*) と呼ばれることである。そしてまた、ヘッドマンが最初は英語の訛音からキプシギス語化したアトメニヤットの語で呼ばれたものの、この語がすたれて、伝統的な指導者を指すキプタイヤットと言う語で呼ばれるようになったことである。

行政首长制に基づく間接統治行政が、最初から滑らかにキプシギス族に受け入れられたわけではなかったとは言え、伝統的な権威機構が、行政首长制に次第に同調し、同化され、編入されていた様子の一端を、行政首长やヘッドマンのキプシギス語の呼び名の変遷にうかがうことができる。もとより、この変化の背景には、領土の半分以上を白人入植地として奪われ、人頭税や小屋税の支払いを強いられて、半ば白人農場のスクウォッター化せざるを得なかった状況の必然によって、キプシギス族が植民地経済にからめ取られていった事実がある。

だが、それと同時に、キプシギス族が、伝統的な指導者たちと行政首长の属性の間にある共通性を見出していたからこそ、キプシギス語で、行政首长が「助言的裁定者」、ヘッドマンが「軍団のリーダー」と呼ばれるようになったのだと考えられる。植民地化当初、行政首长やヘッドマンに選ばれたのは、マナーズの言う通り、「あまり重要でない」人々であった。一言で述べれば、彼等は、何らかの意味で境界的な人々だった。しかしながら、彼等が「あまり重要でなく」境界人であった事実そのものが、伝統的な価値観からしても、彼等の指導者としての潜在的な可能性を保証していたのではないだろうか。逆にいえば、伝統的な指導者たちは、指導者として有能であることを実際に示し、経験を積むことによって、やがて重要な存在として認められるのだけれども、彼等がそもそも指導者の候補者や補佐役として選ばれた理由は、彼等の境界性そのものにあったのではある

まいか。

マナーズは、イギリス植民地政府によって行政首长に選ばれる人々にどんな事が起きるか見当がつかなかったのも、それほど重要でない人々をキプシギス族が推挙したと述べた。他方、後でアラップ・キシアラやキプケテスの例で詳しく検討するが、伝統的な偉大な指導者たちも、自ら敵地へ赴いて交渉に当たる任務を帯びた人たちであり、ときには呪詛を受け、ときには殺害されるなど、常に最も危険な、言いかえれば、「どんなことが起こるかわからない」状態に進んで身をおくことを職務とする人々であったことに注目する必要がある。そして、いずれの場合も、彼等のその境界性は、発動の仕方によって正邪どちらにも作用し得る超人的な力である言葉を操作する彼等の能力の人並みはずれた過剰性がもたらす、社会正義についての両義性と不可分に結びついていたのではあるまいか。

## 5. 伝統的な指導者

この章では、高名な伝統的指導者の伝承を分析しながら、伝統的な指導者の属性を検討する。

キプシギス族の「助言的裁定者」として空前の指導力を発揮したのが、メニヤ・アラップ・キシアラである。彼は、中央部のブレティ地方出身で、1870年から1880年頃に戦士階梯にあったと思われるコロングロ年齢組に属していた。<sup>31)</sup> どのような理由からであったかは知られていないが、彼は若い頃に一時期キプシギス族の領土を離れて、マサイ族の間で暮したことがあり、流暢にマサイ語を操ることができた。S.C. ランガットによれば、アラップ・キシアラは戦士としても卓越した才能を示し、「30才代で」小隊の後衛部隊のリーダーになり、後には中隊の後衛部隊のリーダーに選ばれ、「50才代で」キプシギス族全軍のリーダーに就任した。<sup>32)</sup> また、マナーズによると、ほとんど首長と言ってよいほどの強大な権力を振い、「キシアラの裁可なしには、戦士たちは、誰も敵の領土を襲撃しなかった」。<sup>33)</sup> マナーズは、また、1889年10月13日にイギリス帝国アフリカ会社のフレデリック・ジャクソンが条約と血盟を結んだとき

れるメニャキシヤリアがアラップ・キシアラである旨、マトソンが示唆したと書いている。<sup>34)</sup>

マナーズは、キシアラがキプシギス族全体に権威を振うようになったのは、19世紀末にアラブの隊商がもたらした脅威に対抗する戦略上の必要から、キプシギス族の軍団の権威の集中が促された結果だろうと推測している。<sup>35)</sup> だが、歴史伝承の語るところは異なっている。

キプシギス族は、おそらく、少なくとも1870～1880年頃までは、すべての人々が、強い軍事的性格を帯びた四つの「大氏族」(*boriet*)に分れており、二つの「大氏族」ずつが組になった大隊が軍事的に連合して他部族を攻撃していた。このために、往々二つの大隊の間の意志の疎通が悪く、ンゴイノの戦いを初め、手痛い敗北を喫することが一再ならずあった。そこで、各「大氏族」のリーダーたちが集まって相談した結果、「大氏族」ごとに分かれて住む居住制を廃止して、軍事機構も改革し、すべての小隊に四つの「大氏族」の戦士が必ず加わる編成にした。こうして軍隊の指揮系統が部族全体を横断する軍事機構が初めてできあがったのである。

キプシギス族の政治構造を決定的に変化させ、他のカレンジン諸族と比べてかなり特徴的なものにしたこの一大変革を決定した会議で重要な役割を果たしたのが、キシアラであった。<sup>36)</sup> この改革の結果、キプシギス族は戦闘で大きな成功を収めるようになり、キシアラの権威は増大し、ある時期には彼の属するカップカオン氏族の者でなければ戦闘のリーダーになるのが難しいとさえ言われるほどになったのだった。

キシアラは、「助言的裁定者」としても、きわめて優れた戦略家であったと伝えられている。キプシギス族とマサイ族との間には、サンクチュアリ、降伏、助命嘆願、停戦、講和などに関して、長い伝統に裏打ちされた軍事上の細かな取り決め条項があり、双方が遵守していた。これに匹敵する安定した慣行は、ルオ族やグシイ族との間には存在しなかった。それ故、——他のカレンジン諸族との関係は別として——キプシギス族とマサイ族との間の政治関係は、キプシギス族と他部族と

の政治関係よりもはるかに体系的なものだったと言える。

キプシギス族は、マサイ族を最も手強い敵と見なしていたけれども、尊敬も払い、この二つの部族の関係には「共生関係」とでもいえるような、不思議な均衡的側面があった。オーチャードソンは、両部族間の戦いは厳格な規則に則って行なわれ、牛を賞品とする冒険的なゲームのような気分で戦われたと記している。<sup>37)</sup> キプシギス族は、マサイ族を、このような戦争ゲームの掛け替えのない好敵手であると同時に、まるで持続的な略奪のために、徐々に消耗すべき「財産」とでも見なしていたようだ。彼等が、マサイ族を「生かさず殺さず」の、半ば不即不離の関係におくことを望んでいたとさえ思われる節がある。トウェットは、「<sup>38)</sup>盾」の戦いに触れて、次のように述べている。

(オレスィレアニ・マサイ族が姿を消してしまったときのほかに)、キプシギス族が、「緑の草を手にもって」、マサイ族が戻って来てキプシギス族の傍に住み、またお互いに戦いを交えられますように、と彼等の全能の神に祈りを捧げた、また別の機会があった。<sup>38)</sup>

マサイ族を一気に壊滅させたり、遠方へ追いやってしまわないで、半ば「共生的」な関係を維持しながら、巧妙な策を弄しては、ジリジリとマサイ族を消耗させてゆくのがキプシギス族の戦略だった。キシアラは、この種の戦略に基づく講和を成立させるのに抜群の才能を示した人物であった。「助言的裁定者」は、この意味で、両部族を仲介し、その政治関係を体系的に組織する機能を果たしたのである。

キシアラは、タブチレルとキプケテスという二人の人物と連れ立って、しばしばマサイ族のもとに赴いて、和平交渉に当たった。次に、彼の最も水際立った講和交渉だったとされる事例の伝承を追ってみよう。

…マサイ族は、キプシギス族こそが彼等の土地へ移り住むべきだと主張した。アラップ・キ



シアラは答えた。「できるものなら喜んでそう  
もしよう。ところで、私には大量の牛乳を出し  
てくれる、とても大きな雌牛がある。この雌牛  
は脚を折っていて歩けない。とてもマサイ族の  
土地まで連れていけない。私は、この雌牛を後  
に残してくることも、屠ることも望まない。こ  
の雌牛がいなければ生きてゆけないのだ」。そ  
こで、マサイ族が譲った。「それなら、われわ  
れがお前の土地へ移ってゆこう。われわれは講  
和を結んで、今や親密な関係にあるのだから」。  
こうして、キレビ・マサイ族が、キプシギス族  
の土地近くへ来て住むことになった。キレビ・  
マサイ族の「助言的裁定者」が、アラップ・キ  
シアラを訪ねて来て質問した。「件の雌牛は何  
処かな?」。彼は答えた。「今度やって来たとき  
に見せてあげよう」。次にキレビ・マサイ族が  
やって来たときに、アラップ・キシアラは、存  
分にビールを振舞った後、たわわに実ったシ  
ョクビエの畑へ彼等を誘って言った。「さあ、こ  
れが件の雌牛だ。どうしてこれを歩かすことが  
できよう。これが(お前たちにとっての牛の乳  
と血のように)われわれの主食なのだ。さっき  
お前さん方が楽しんだビールも、この雌牛が与  
えてくれたのだよ。」こうして、キレビ・マサイ  
族とキプシギス族は、しばらくの間平和に共住  
した。やがて、キプシギス族がキレビ・マサイ  
族を襲い、多くの戦士を殺し牛を略奪した。<sup>39)</sup>

アラップ・キシアラは、純粋な牧畜民であるマ  
サイ族のセンチメントに巧みに訴えかけて成功し  
た。この種の事件は、しかし、これっきりででは  
なかった。キシアラたちによって、いく度か同様の  
講和が結ばれ、両部族は隣合って住んだ。その都  
度、講和を破って略奪したのはキプシギス族の方  
であった。キシアラの講和に従って、キプシギス  
族の近傍へ移り住んだマサイ族のカップトロンゲ  
イ氏族は急襲を受けて壊滅したと伝承されている。

先の伝承で注目になるのは、キシアラが、「た  
くさん乳を出すけど歩けない雌牛。これ何だ??」  
と言う子供の謎々遊びを巧みに用いていることで  
ある。先に第3章で述べたとおり、大人は謎々を

口にするのを固く禁じられており、この禁を犯  
す者は、「謎々者」として忌み嫌われたのである。  
キシアラは、キプシギス族の間に、大いなる「謎  
々者」として知られていたわけである。

アラップ・キシアラが用いた策略や論法は、キ  
プシギス族の民話の有名な主人公であるキブリ  
オ・モクウォの物語りをすぐに連想させる。最も  
よく人口に膾炙しているキブリオ・モクウォの物  
語りはこうである。

あるとき、キプシギス族がマサイ族に講和交  
渉を申し込んだ。マサイ族の方では、どうして  
も講和する必要があるとは考えていなかったの  
で、無理難題をふっかけて来た。「応じてやろ  
う。だが条件がある。真黒い糞をする真黒の去  
勢牛と真白い糞をする真白な去勢牛、それから  
牛の角にいっぱいのお蜜を集めて、交渉の場へも  
って来い。」

キプシギス族の「助言的裁定者」たちは思案  
にくれていたが、キブリオ・モクウォという名  
の子供が次のような知恵を授けた。純白の去勢  
牛には、草の代わりに塩土を混ぜた牛乳を、漆  
黒の去勢牛には煤を混ぜた牛乳を与えてしばら  
く飼い、つぎに黒い雌牛の尻尾の先の毛を細か  
く切り取って牛角いっぱいに満たし、会見の場  
ではそれを空中にあけて風に吹き散らさせるよ  
うに、と、キブリオ・モクウォの策略のおかげ  
で、マサイ族は本意でない講和を承知させられ  
た。<sup>40)</sup>

この民話の主人公を、そのままアラップ・キ  
シアラに置き換えても、歴史伝承として通用しそ  
うである。だが、決定的な違いは、民話ではキブリ  
オ・モクウォが子供として描かれていることだ。  
謎々は、子供の専有する論理と発話形式であり、  
キブリオ・モクウォは子供であるが故に、民話の  
英雄なのである。他方、アラップ・キシアラは歴  
史上の英雄ではあっても大人であるが故に、「謎  
々者」でもあり、社会規範の侵犯者として、一面  
では畏怖されたのである。<sup>41)</sup> さらに言えば、彼は  
一時期キプシギス族の土地を去ってマサイ族の間

で暮したことがある故に「異人」でもあったのだ。

マサイ族にも、キシアラ同様、優れた「助言的裁定者」がいたと言う。オレ・ラングニャは、しばしばキプシギス族の鼻を明かしては憎まれていた。彼は、あるとき、キシアラの胞輩としてマサイ族との交渉に活躍したキプケテスが、講和の交渉にマサイ族の土地を訪れたときに、彼を暗殺してから素知らぬ顔でキプシギス族との交渉に臨んだ。彼を怪しんだキプシギス族の人々が集会的呪詛を構成要素とする宣誓（ムマ）に訴えたために、オレ・ラングニャは、マサイ族の人々に語りかけられている最中に、舌を噛み切って絶命したとされている。<sup>42)</sup> 異伝では、彼は交渉の帰り道に、躓いて舌を噛み切って死んだとさえされている。<sup>43)</sup> この異伝にも、超人的な力としての言葉に対する信仰をうかがい知ることができる。キプケテスとは、すぐに躓く男に付けられる仇名である。躓いて舌を噛み切ったオレ・ラングニャの死に様が、そのままキプケテス暗殺の事実を露見させているとキプシギス族の人々は考えたのであった。

アラップ・キシアラのもう一人の補佐であったタブチレルについては、彼がどのような人物であったのかほとんどわからないが、キプケテスはナラチェック氏族の人であったことが知られている。ナラチェック氏族は、チェモイベンの戦いに破れてキプシギス族に吸収されたグシイ族の人々によって創始された新しい氏族の一つである。ボクセレック氏族やマバシク氏族など同様の起源をもつ氏族の人々を、キプシギス族の人々は、今日でさえ往々、「彼等は本当のキプシギス族ではなく、グシイ族だ」と言うことがある。キシアラの時代には、こうした見方ははるかに強かったはずである。その当時に、キプケテスが「助言的調停者」として、またアラップ・キシアラの片腕として活躍していた事実も、キプシギス族の指導者たちの周辺性あるいは境界性をよく示していると言える。

キプシギス族の歴史上、アラップ・キシアラや、白人の到来と支配を予言した伝令であるアラップ・ムゲニと並んで、人々によく知られている人物に、マラブン・アラップ・マキチェがある。彼は

モゴリ＝サオサオ戦役で敗戦の原因を作った「軍団のリーダー」である。<sup>44)</sup>

モゴリの戦いは、1890年頃に現在のニャンザ州キシイ県の県都キシイの東7～8キロメートルに位置するマンガ丘陵のあたりで戦われた。キプシギス族は、当時グシイ族やルオ族との戦いではほぼ常勝を収め、彼等を追って徐々に南下を続けていた。モゴリ戦役は、グシイ族に対する大規模な長征で、中央部のブレティと南部のソトの二つの「大地域」の者を主力として、キプシギス族の大部分の戦士と強壯な老人が参戦した。<sup>45)</sup> そればかりでなく、割礼前の少年や女性までが、食糧の運搬員や山羊・羊の略奪要員として動員された。グシイ族は、すでにルオ族やクリア族の領土近くまで退散していたので、グシイ族を攻めるには、長い行軍をしなければならなくなっていたからである。

この戦役でも、キプシギス族は小規模な戦闘で連戦連勝を収めて進攻し、略奪をほしいままにした。だが、攻勢に任せ、あまりにも深くグシイ族の領土に入り込んでしまったために、キプシギス族の全軍は、ある朝目覚めるとグシイ族とルオ族の連合軍に完全に包囲され、絶体絶命の窮地に陥っていた。<sup>46)</sup> キプシギス軍を率いていたのは、ともにキシアラの権威のもとにあったソト地方の「軍団のリーダー」、マラブン・アラップ・マキチェと、ブレティ地方の「軍団のリーダー」、チェセングニ・アラップ・カボロックであった。アラップ・カボロックは、実はあまりにグシイ族を深追いしすぎたことに危惧を感じて、前夜のうちに撤兵することを主張していたのである。ところが、アラップ・マキチェが、マンガ丘陵の麓で一夜の休息をとることに固執したために、アラップ・カボロックが折れたのだった。さて、グシイ族の包囲網にはまったと気付いたこのときにも、取るべき戦術を巡って、二人のリーダーの意見が激しく対立した。包囲網の一角を突いて血路を開き、できるだけ多くの兵員の退却を可能にすることに全力をあげるべきだと主張するアラップ・カボロックに対して、アラップ・マキチェは、最後まで徹底抗戦の方針を譲らなかった。その結果、大多

数の人がアラップ・マキチェに従い、皆殺しにされたのである。

カボロックは、マサイ族の領土を経由して、ごく少数の戦士たちとかりうじてブレティ地方へ逃げ帰った。歴史伝承は、この敗戦は壊滅的な大打撃となり、キプシギス族の土地にはその後しばらくの間男性の影が絶えたとさえ伝えている。そのため、長老たちは一計を案じ、少年たちのイニシエーションを大巾に早め、——部族法に反することだが——未亡人たちも子供を得られるように、頻繁に「歌垣」を催さなければならなかった。

キプシギス族は、他のカレンジン諸族と同様、夜襲に長じていたが、「日中の戦闘は不得手」<sup>47)</sup>であり、他方、「ルオ族とキシイ族(グシイ族)は、日中の戦闘の専門家であった」。<sup>48)</sup> それでは何故、アラップ・マキチェがマンガ丘陵の麓で一夜の休憩をとり、また翌朝絶体絶命の窮地にあると知った後もなお絶望的な戦いを挑むことを主張して譲らなかったのだろうか。さらには、いったいどうしてほとんどの参戦者が、カボロックではなくマキチェに従ったのであろうか。

何人かの研究者は、次のように指摘している。

マラブン(・アラップ・マキチェ)の母はキシイ族(グシイ族)の出身だった。マラブンは、彼の(グシイ族の)親族たちに会おうとして(マンガ丘陵で)一晩の休憩をとったものであろうと言われる。<sup>49)</sup>

マラブ(Malabu, sic.)は、翌朝彼のオジの家の人々と挨拶を交すまで、軍隊を撤退させようとは思ってもよらないと抗弁した。彼の母親がグシイ族の人だったので、彼は他のキャプテンたちにこう言ったのだった。<sup>50)</sup>

だが、ここに見たような説明では、マキチェは、裏切り者のように扱われることになる。そして、その裏切りの原因は、彼がグシイ族と血の繋りをもつ事実に戻されている。ところが、これは、今日もキプシギス族の人々がマキチェに寄せる親愛と尊敬の念を思い合わせれば、奇異なことだと言

わざるを得ない。

アラップ・マキチェは、グシイ族との打ち続く戦役で最も恐れられた猛将だった。グシイ族の予言者であり、モゴリ戦役の総指揮者でもあったサカワは、グシイ族の戦士に特に命じて、マキチェの死体の前面の皮膚を頭の頂から足の爪先まで剥ぎ取らせて、自分のもに届けさせたと言う。<sup>51)</sup> また、異伝では、彼の陰部が切り取られ、サカワに届けられたと言われている。いずれにせよ、グシイ族に誰よりも恐れられ憎まれていた人物が、本気でグシイ族のオジたちに挨拶すると言ひ出し、ほとんど全軍の戦士が、アラップ・カボロックの合理的な作戦の提示にもかかわらず、唯々諾々とマキチェの申し出に応じたと考えるのは無理があると見なければならない。

別の理由付けはこうである。T.トウェットは、マキチェが次のように言ったとする。

他部族の人々が、われわれが、泥棒どもとは様変わり、雄々しく彼等の牛群を連れ去る様を目撃できない夜の夜中に、こそこそと(牛を連れて、泥棒のように)逃げ出すような真似をするつもりなどさらさらしない。明朝まで待たないでどうしようか。<sup>52)</sup>

T.トウェットの父もグシイ族の出身である。彼の説明は、アラップ・マキチェの行為を著しく合理化している。だが、私の知る限りでは、T.トウェットのような異伝は全く聞かれず、どのバージョンでも、マキチェが「わが母を産んだオジたちに挨拶するまでは帰らない」と言い張った点では一致している。それでは、彼が、果たして本当にグシイ族の親族との挨拶を切望していたのだろうか。

実は、そうではない。「わが母を産んだオジたちに挨拶するまでは帰らない」とは、もう一人の軍団のリーダーであるアラップ・カボロックの小心をなじり、戦士たちを鼓舞して、彼の積極策に対する支持を取りつけるために彼が用いた殺し文句だったのである。キプシギス族の男にとって、勇猛であることは何にも勝る徳目であり、臆病と

なじられるのは最大の不面目だった。

上に挙げた三人の研究者は、現在のケニアでは超インテリである。部族の優秀な学生たちは、有名な中学校や高校で教育を受けるために、年若いうちに部族の土地を離れてしまうために、自部族の言語や文化に疎い面がある。それ故に、キプシギス族であれば誰でもすぐにそれと察しがつく、マキチェの言葉のレトリックが理解できなかったのである。<sup>53)</sup>

キプシギス族の男たちは、しばしば自分と同腹の姉妹たちを「われわれの娘たち」と表現する。その理由は、姉妹が嫁ぐときに相手の男の家から婚資として支払われる家畜は、父親に手渡され彼の管理のもとに置かれるけれども、実際には彼女たちの兄弟に対して与えられたものだと考えられているからだと言われる。また、父親が没したあと、それらの家畜を実際に管理するのも兄弟たちである。父親は、管理はしてもけっしてそれらの家畜を自分自身のために用いてはならず、すべてが兄弟たちが嫁をもらうときに支払う婚資に充てられなければならない。これは、部族の慣習法が定めるところだ。もし父親が、娘たちと交換に与えられた婚資の家畜を用いて自分自身の新しい妻を娶うようなことがあれば、彼は「娘と寝た男」と呼ばれ、「本性にもとる行為をする者」(8頁参照)として、ひどく忌み嫌われ蔑まれることになる。

アラップ・マキチェは、キプシギス族の男たちの用いる「われわれの娘」という慣用表現を逆手にとって、グシイ族を「わが母を産んだオジたち」と言い表わし、今どんな苦境にあらうと、グシイ族との戦闘などは自分にとっては、親愛の対象である母方のオジたちと挨拶を交す程度のたやすいことだと見得を切ったのだ。

もう一つのキイ・ワードは、「挨拶する」(*kat*)と言う語だ。*kat*という語は、挨拶すると言う意味で用いられることが多いけれども、その背後にあるもっと基本的な内容は、相手に負担を強いると言う意味であることは、すでに第3章で述べておいた。だから、マキチェの件の表現には、「グシイ族に目にも見せてやらないうちは帰らない」

と言う含蓄がある。

マキチェは巧みなトリックを用いて、カボロックの弱腰を手ひどくなくしたのだ。臆病と呼ばれるほどの侮辱はない。敵を一人も殺したことのないお前は女だ、腰抜けだ、氏族の名折れだとなじっては戦士たちを激昂に誘い、激しい攻勢に駆り立てるのは、長老たちが戦闘の直前に用いる常套手段である。マキチェはレトリックを駆使して、カボロックを圧倒し去った。だからこそ、ソト地方の戦士たちばかりでなく、カボロックの指揮下にあったブレティ地方の戦士たちまでもがマキチェに従って、絶望的な戦いに自らを駆り立てていったのである。ところで、マキチェの用いたレトリックは、ほとんど謎々遊びの論理に近いものだ。マキチェは、グシイ族と血の繋がりがあり、グシイ語を解する「異人」であるばかりでなく、彼の卓越した弁舌、すなわち超人的な力としての言葉を操る過剰な能力の故によっても境界人だったのである。<sup>54)</sup>

モゴリ戦役の究極的な敗因は、上記の事実にもかかわらず、必ずしもアラップ・マキチェに帰せられてはいない。キプシギス族の敗戦は、たとえその直接的なきっかけが何であろうと、神がすでに定めていた運命だったとするのが、今日でもキプシギス族の人々の一般的な見解になっている。以前にも簡単に触れたように、ナンディ族の予言者の地位を兄弟のコイタレル(彼の別名はサモエイ)と争って破れたキプチョンベル(別名コイレゲン)が、当時キプシギス族の間に身を潜めていた。コイレゲンは、モゴリ戦役でのキプシギス族の壊滅的な敗戦を的確に予言していた。彼は、グシイ族の領土へ向けてすでに行軍を開始していたキプシギス族の軍団へ伝令を派遣して、出兵をすぐに思い留まるように「忠告」した。軍団のリーダーたちは、コイレゲンの予言を一笑に付し、伝令を腰抜けとさんざんに嘲弄した。かくして、コイレゲンの予言が一蹴されたとき、悲劇の成就が決定づけられたのだと信じられている。また同時に、当時連勝に酔って慢心の極にあったキプシギス族の「軍団のリーダー」たちは、腹の白い鷺や啄木鳥などと歩行者との相対的な位置関係によ

って神が示している幸・不幸の予兆を正しく読み取る大切な任務を疎かにしていたとも言われている。ともかくも、今日でもなお、アラップ・マキチュは、けっして裏切り者としてではなく、悲劇性を帯びた、限りなく勇猛な英雄として語り継がれている。

モゴリ戦役がキプシギス族の歴史に与えた最大の影響は、コイレゲンが、キプシギス族の初代予言者としての地歩を固め、予言者と彼の氏族（タライ氏族）および伝令たちが、キプシギス族全体への宗教的な影響力を振い始めたことであった。もし、イギリス軍がキプシギス族と接触するのがもう少し遅れ、予言者の権威が完全に確立されていたならば、おそらくキプシギス族も、予言者を部族的忠誠の新たな核として、有名なナンディ族の場合と同様、イギリス軍に激しい抵抗をしたであろうと指摘する研究者もある。この見解の当否についての判断はともかくも、モゴリ戦役における敗北は、言葉を操る新たなタイプの職能者が、キプシギス族全体に強力な宗教的影響力を行使し始めると言う、歴史的な大変化をもたらした。ここでも、予言者と彼の氏族の者は、ウアシン＝ギシュ・マサイ族の末裔であり、ナンディ族を経由してキプシギス族の間に入り込んだ境界人であることに留意しておく必要がある。

## 6. 結 論

前章で検討したとおり、平等主義的なキプシギス族の社会で、各種の戦闘のリーダーたちは、重要な政治機能を果たしていたが、その職につくための条件は勇猛な戦士であったことと、味方とともに敵をも巧みに説き伏せる弁論能力と智略とであった。なかでも後者が重要で、この能力こそが体力が衰えて参戦できなくなったとき、軍団のリーダーが「助言的裁定者」に就任して、軍事面でもなお軍団のリーダー以上の影響力を行使するばかりでなく、法的な領域でも最高の権威たり得るための必須の要件なのである。戦士のリーダーたちや「助言的裁定者」たるにふさわしい人物として人々に認められるには、「ベリル」(berir) すると言う特別な弁論能力を身につけていることが

必要であった。「ベリル」するとは、西欧の論理学で言うような推理の理性を働かせて、理路整然と論証することではない。キプシギス族の間では、簡潔に要領を得て、正鵠を射る論法は、説得的でないばかりでなく、破壊的であり、むしろ忌避されるべきものである。望ましい弁論法とは、自らはしっかりと論点を把握しながら、直截的にそれを示すことをせず、その周囲を、順々にインパクトのある論述で照射することによって、聴き手の内面から話者が把握している論点が自ずと浮かび上ってくるように仕向ける弁じ方だ。これが、「ベリル」することである。「ベリル」するためには、メニャ・アラップ・キシアラや、マラブン・アラップ・マキチュの歴史伝承の詳細な分析を通じて例証したような、多彩なレトリックが用いられる。そのレトリックは、ときとして子供が独占するはずである謎々遊びの論理に際限なく近似してくるのだった。アラップ・キシアラは少しも舌を休めることなく「ベリル」することができたと伝えられている。「ベリル」することは、しかしながら、必然的に人を「言葉の多い」両義的な存在にするのである。

キプシギス族の人々が、自ら、初期の行政首長として推挙した人物の多くは、「謎々者」や「異人」であり、それ故に境界人であった。さらに、行政首長たちばかりでなく、伝統的な指導者である各レヴェルの戦闘のリーダーと「助言的裁定者」もまた同様に境界人であったことが、以上の考察から明らかになった。モゴリ戦役の敗戦によって、キプシギス族の間に影響力を確立し始めた予言者も、言葉を操る専門的職能者であり、その出自からして明確に境界人であった。

そればかりではない。人々の不幸の原因を解釈し、治療を施す女性の呪師たちは、キプシギス族の政治構造において、既述の指導者たちと並んできわめて重要な機能を担っている。彼女たちの多くは、グシイ族などの近隣の部族と近い親族関係をもっているか、遠くない過去にそれらの部族からキプシギス族に入って来た「異人」を始祖とする氏族に属している。<sup>55)</sup> さらには、かつてムマと呼ばれる、妖術的要素を含んだ「宣誓」を請け負

う職能者として大いに恐れられた鍛冶師もまた、グシイ族やマサイ族に起源をもっていた。<sup>56)</sup>

これらの人々は、さまざまな形式で言葉を操作する特別の能力をもっていた。第3章で見たとおり、言葉は超人的な力であり、発動の仕方によって、善悪どちらの方向にも作用し得る。従って、これらの人々も社会的正義に関して、自ずと両義性を帯びることになる。逆に言えば、境界人こそがこれらの人々が果たした機能の担い手にふさわしい存在である。

もう一つ、注目すべき事柄がある。「助言的裁定者」たちは、戦闘のリーダーたちとは異なり、近隣組織における調停者としての役割に関しては、自分が担当する特定の地域をもたず、乞われては各地を訪れてその任に当たっていた。「助言的裁定者」は紛争に関係する当該近隣組織の外部から招かれなければならなかった。この事実には、「助言的裁定者」の境界性がよく表わされている。だが、彼の境界性は、同時に個々の近隣組織の利益と忠誠を、部族全体の利益と忠誠に結びつける媒介的機能をもっていたわけである。「助言的裁定者」は、法的機能をもつ基礎的な社会単位である近隣組織を、部族の政治構造においてより高次の政治関係へと仲介する。<sup>57)</sup>

しかしながら、境界人を重要な役職につけるとすれば、彼等によって部族の統合が損なわれる危険が生じ得よう。キプシギス族の人々が、安んじて境界人を種々の指導者として選び出せるのは、これらの職にある人物を十分に制御し得るものとしての「呪詛」(*chubisiet*)の信仰が、彼等の世界観の中心に組み込まれているからである。

「呪詛」とは、基本的には社会正義に関して正当な立場にある者が、超人的な力である言葉に、特定の形式に従って訴えて、他人を制裁する道徳的な行為である。逸脱者に制裁を加えて、キプシギス族の社会全体の秩序を維持する機能を呪詛の信仰が担っていることは、すでに他で論じたとおりである。<sup>58)</sup> 近隣組織が執行する集合的な呪詛が、少なくとも植民地初期には、あらゆるタイプの指導者の権威を十分に制御していたし、今日でも集合的な呪詛は大いに恐れられている。<sup>59)</sup> 事実、

初期の行政首长たちの少なからぬ人数が短命で、就任後数年を経ずして没している。それは、彼等が、植民地政府寄りになりすぎて、人々から集合的な呪詛を受けたからだと言われている。

植民地政府の手先として苛酷だったのは、行政首长たちよりも、むしろシャンバ・ボーイやスワヒリ語でカンガと呼ばれる行政警官あがりのヘッドマンたちだった。彼等の多くは集合的な呪詛を受けたばかりでなく、夜間、焼き打ちを受けた。人々は、口裏を合わせて、「流れ星が落ちた」のだと言いつ張った。キプシギス族の信仰では、「本性にもとる行為をした」罪人(8頁参照)には、神が、雷や流星を落として制裁を加えるのである。

キプシギス族の間の、集合的な呪詛と(伝統的な)指導者の権威の属性との相互関係を理解するには、ペリスティアニの重要なインフォマントであったキプスィオンゴ・アラップ・テレルの事例を引くのが好都合である。彼は北部にあるベルグート地方北部の「軍団のリーダー」を勤めた後に行政首长に選ばれ、その職を辞した後で、伝統的な「助言的裁定者」に就任し、人々の声望が高かった人物である。ペリスティアニは、次のように述べている。

アラップ・テレルは、ここ四年の間に三度、(高齢の故に、「助言的裁定者」の)職を辞したいと申し出ていたが、その都度、もし(辞職を拒む)人々の命令に服しないのなら、チュビシエット、すなわち呪詛を彼の身にかけるぞと脅迫され、拒絶された。このことは、偉大な「助言的裁定者」が個人的な権威をもっているのではなく、近隣組織の代弁者であることを示している。<sup>60)</sup>

この事例と、その解釈は興味深い。ペリスティアニは、「助言的裁定者」を人々の代弁者であるとするけれども、私は両者の関係を初め、指導者と一般の人々との関係は、もっと緊張した拮抗関係にあり、その均衡は、超人的な力としての言葉を操る、両者に特有の、能力の対抗的な関係に依存していたと考えたい。



戦闘のリーダーや「助言的裁定者」などの伝統的な指導者に選ばれるのは、専ら個人的な資質と業績によるのであり、それらの役職は、一般的には特定の氏族や家柄に結び付けられてはいなかった。しかし、これまでにいく人かの指導者の伝承を詳細に調べた結果、彼等の多くが、他部族から養取された人物であったり、他部族出身の女性の息子であったり、他部族の人々が降服してキプシギス族に編入されて創設した氏族に属している人々、すなわち「異人」かそれに近いカテゴリーの人々であったことがわかった。また、その多くは、「本性にもとる行為をする者」や「謎々者」に類するカテゴリーにも分類された。予言者は、ナンディ族を経由してキプシギス族に入ってきたウアシン＝ギシュ・マサイ族起源のタライ氏族が独占し、女性の占師も他部族との歴史的繋がり強い氏族の者が多い。これらの指導者たちは、それぞれ特定の仕方で、超人的な力である言葉を操る専門家である。彼等のその能力は、ごく大きく分類するならば、*kat*（5－6頁参照）の概念に結び付く。*kat*の中心概念は、端的に言えば、言葉によって相手に負担を強いることである。

一方、集合的な呪詛（*chubisiet*）は、一般の人々が、犯罪者を制裁すると同時に指導者の権威を制御するために行使するものだが、人々の先頭に立って、集合的な呪詛の執行に責任をもつ氏族がある。カップチェボイン、カップチェブコルウォル、キバエック、キプサマエックなどの氏族がそれである。このうち、カップチェボコルウォル氏族は猛禽に対する呪詛に、キプサマエック氏族はハイエナに対する呪詛にとくに優れると言われている。これら、呪詛を得意とする氏族は、「舌の苦い人々」と呼ばれる。これらの氏族の多くは、起源の古い氏族であり、往々、「真のキプシギス族」と呼ばれることがあり、自らもそれに誇りをもっている。呪詛（*chub*）の中心的概念は、不当に過剰な負担を強いられた者が、それに反撃するために、超人的な力である言葉に訴えてする正当な攻撃である。

以上から、次のような結論を導くことができるであろう。キプシギス族の間では、周辺的な人々

の間から指導者が選ばれるが、彼等の能力と資質は、超人的な力である言葉に訴えて、他人に負担を強いる積極的な発話形式である *kat* の概念に結びついている。他方、一般の人々は、超人的な力に訴えることによって、過剰な負担を強いた者に反撃する防衛的な発話形式である *chub* によって指導者の権威を制御する。そして、この能力は、中心的な氏族が代表している。超人的な力である言葉を発動するこの二つの相補的かつ拮抗的な能力を代表する人々の間の、緊張を孕んだ均衡的な関係によって、キプシギス族の政治がダイナミックに機能したのである。

以上のような権威構造は、少なくとも、植民地期の初期から中期には十分に機能していた。だから、初期の行政首長が、実際に重要でない人々の間から選ばれたとしても、その事実は、必ずしも権威構造を根本的に変化させることにはならず、行政首長制は比較的円滑に受け入れられたのだと考えられる。やがて、現金経済が浸透し、土地が囲い込まれて細分化され、戦士階梯がその機能を完全に喪失した後にも、かつての戦闘のリーダー層や英国アフリカ人ライフル隊で経験を積んだ人々の間から行政首長や副首長が選ばれた。また、その退職者が「助言的裁定者」の役職を勤めることが多く、かくして伝統的な政治構造は、行政首長制とうまく融合していった。

今日でも、かつての英国アフリカ人ライフル隊出身者や、行政警官を勤めていた者から、行政首長、副首長、「近隣組織の長老」が多く選ばれているし、部族の慣習法に則って運営される近隣組織の長老会議はそのまま温存され、国家の法＝行政的な末端機構としてきわめて有効に機能し続けている。<sup>62)</sup>

## 注

- 1) Lienhardt, 1964, p.69. 増田・長島訳, 98頁.
- 2) Gluckman, 1956, p.80. 吉田訳, 142頁.
- 3) Evans-Pritchard, 1947.
- 4) Manners, 1967, p.208.
- 5) 私の調査は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）を得て一橋大学が行なった「環ヴィクトリア湖地域のエスノヒストリー手法による総合社会調査」（研究代表・長島信弘）の第2次（1979－80

- 年)および第3次(1981-82年)の一環として、単独で実施した。
- 6) 1969年の国勢調査までは、カレンジン語系の各部族は独立した部族として扱われているので、各部族の正確な人口が記録されている。しかし、1979年の国勢調査では、カレンジンが一つの部族としての取り扱いを受けたために、キプシギス族を初め、カレンジン語系諸族の個々の人口については、公式の記録が発表されていない。
  - 7) 小馬, 1983a.
  - 8) *kirwogindet* の名称は、「討論する」とか「協議する」と言う意味の動詞 *ruoch* および、「調停する」とか「調整する」と言う意味の動詞 *ruokin* に由来する。cf. Orchardson, 1961, p.17.
  - 9) Peristiany, 1939, p.179. 私の調査結果は異なる。
  - 10) 以上の記述は、概して、Peristiany よりも Orchardson や Lang'at の記述と一致する点が多い。Peristiany は、多くの近隣組織が共同で防衛に当たるとし、この近隣組織群ごとに、「戦士のリーダー」、「助言的裁定者」、「儀礼の長老」が一人ずつおり、それぞれが軍事、政治、宗教的権威を行使すると述べている(1939, p.164 *et al.*)。だが、彼は、たとえば、役職として取るに足りない祝福師をイニシエーションのリーダーと取り違え、これを「儀礼の長老」と言う特定性をもたない一般的な尊称で呼ぶなど、彼の記述には混乱や誤りが目立つ。彼は、キプシギス族の社会・政治構造を分節的な図式を用いて過度に一般化する傾向が強い。このためか、小さな地域にすぎないワルダイを、ベルグート、ブレティ、ソトの三つの「大地域」と並んで「大地域」の一つとして数えあげている。また、彼の挙げている一つの「大地域」の大隊の構成戦士数は、当時の推定人口を勘案すると、極端に小さい。Peristiany (1939) は、キプシギス族の社会、文化を全体的に記述した最初の著作としての意義は大きい。注意深く読まれる必要がある。
  - 11) 小馬, 1983b 参照。
  - 12) 小馬, 1982a.
  - 13) 逆に、成人がすでにしでかしてしまった所業を、ある発話形式によって児戯に置きかえて、その破壊的な作用を除去する行為も行なわれる。正式な手続きを経て詫言を乞うて来た人物を許す言葉は次のように定式化されている——「あの事は児戯(*tang'oi*)にしよう。われわれは、かつて児戯をなしたのだ。『言葉はない』(問題はない)」。
  - 14) 子供の生意気な言葉使いも、「呪詛する」チュブ(*chub*)と言う動詞で表現される。例えば、子供たちが生意気を言いあうことは、「子供たちが呪詛しあっている」と言う。
  - 15) 言葉は、発話にすら必ずしも依存しない力である。キプシギス族のチュブシエット(*chubisiet*)という概念を、これまでは便宜上、呪詛と訳してきたが、チュブシエットを逆用して攻撃に用いることもできる。それ故、チュブシエットは「口による妖術」とも呼ばれる。ところで、イニシエーションの最初の儀礼を受けてからしばらくの間、ノヴィスたちは口を利くことを許されない。この期間、ノヴィスは、口の代わりに身振りを使って呪詛する(「口の妖術」を使う)と言われる。このことから、キプシギス族の間では、「言葉」と言う超人的な力は、人間が使う言葉・すなわち発話と密接に結びついてはいるけれども、それ以上の独立した力であることがわかる。
  - 16) キプシギス族を初め、パラ=ナイル語系の諸言語では、/g/と/k/とは音韻として有意な対立をなさない。従って、*gat* も *kat* も音韻的には等値である。
  - 17) 長島, 1981, 16-17頁。
  - 18) 動詞は *nyogat*。
  - 19) このような重大な状況では、儀礼的謝罪には、山羊または羊一頭程度の贈り物が添えられるのが普通である。
  - 20) 因みに、Hilders & Lawrence は、テソ語の *gat* に関連する語として *ai-gat* (呪詛) とともに *a-gat* と言う動詞をあげ、*roar* の訳をつけている。*a-gat* が人間についても用いられるかどうか不明だが、用い得るとすれば、テソ語の *gat* も、言葉に訴えて、他人に何かを強制することが基本的な語義であると考えることができるかも知れない。
  - 21) この概念は、*nyegem* とも言われ、忌み嫌われている。
  - 22) この語は、*katam* (左)とも関連する。
  - 23) 小馬, 1983b, 7頁参照。
  - 24) 因みに、スワヒリ語にも、同様に、「言葉がない(問題がない)」、すなわち "*Hakuna maneno*"。と言う表現がある。
  - 25) この事件が、キプシギス族がルンブワ族(Lumbwa)と呼ばれ始めた原因だと伝えられている。スワヒリ語では大を、ンブワ(*mbwa*)と呼ぶからである。因みに、つい最近まで、キプケリオン町のルンブワと呼ばれていた。
  - 26) Manners, *op. cit.*, ; Ellis, 1976; Matson, 1970, 1972a, 1972b; Ng'eny, 1970; Magut, 1961; Chichir-Chuma, 1975; Gold, 1978; *et al.*
  - 27) Manners, *op. cit.*, p.321.
  - 28) Korir, 1974.
  - 29) Komma, 1981, pp.111-113.
  - 30) Orchardson は、他部族から自発的にやってきて、キプシギス族の慣習に従って暮すようになったものをキプサガリンデットと呼ぶが、養取された者はそうではないとする(1961, p.9)が、私の調査では、どちらもキプサガリンデットである。
  - 31) この年齢は、キプコイメットという別名でも知られている。
  - 32) Lang'at, 1969, p.85.
  - 33) Manners, *op. cit.*, p.250.
  - 34) *Ibid.* p.249.
  - 35) *Ibid.* pp.250-251.

- 36) Lang'at, *op. cit.*, pp.84-85.
- 37) Orchardson, *op. cit.*, p.7.
- 38) Toweett, 1979, p.23.
- 39) 筆者自身の採話による。
- 40) 筆者自身の採話による。
- 41) 歴史伝承が伝える策略や論理は、キプシギス族の民話で「謎々者」として大活躍する野兎を彷彿とさせる。
- 42) Toweett, *op. cit.*, p.13; Lang'at, *op. cit.*, p.86.
- 43) Orchardson, *op. cit.*, p.6; Orchardson のいうルルニヤとキプケレスは、それぞれラングニヤとキプケテスであると考えられる。
- 44) この戦役をキプシギス族はモゴリ戦役と、グシイ族はサオサオ戦役と呼ぶ。
- 45) ベルグート地方から参加した戦士は、それほど多くなく、主として略奪部隊に加わっていたと言われる。cf. Lang'at, *loc. cit.*
- 46) キプシギス族の伝承では、さらにクリア族の部隊もグシイ・ルオ連合軍に加わっていたと言う。ただし、この点はかなり疑わしい。cf. Mokamba et al., 1974, p.230.
- 47) *Ibid.*, p.231.
- 48) *Ibid.*
- 49) Lang'at, *op. cit.*, p.87.
- 50) Kipkorir, 1979, p.37.
- 51) Mokamba et al., *op. cit.*, p.233.
- 52) Toweett, *op. cit.*, p.25.
- 53) Kipkorir は、キプシギス族と同じくカレンジン諸族に属するマラクウェット族の出身であるが、ナイロビ大学の学生だったキプシギス族の青年をインフォマントとして用いた。cf. Kipkorir, *op. cit.*, "Acknowledgement".
- 54) 因みに、アラップ・マキチュの母がグシイ族の女性であったとする説のほかに、彼自身がグシイ族から養取されたとする伝承もよく聞かれる——cf. Toweett, *loc. cit.* 戦闘時に拾われた子供が養取されるばかりでなく、飢饉のときには、両部族の間で、子供と穀物が交換されていた。他方、成人の養取は稀だった。いずれにせよ、後者の説を取るならば、アラップ・マキチュは「異人」に分類され、彼のもつ境界性が一層明確になる。
- 55) 女性の占師は、今日でも、災因を解釈し、また不幸の原因を除く専門家として重要な社会的存在である。だが、その能力を意図的に悪用して、不幸をもたらすことを疑われ、恐れられてもいる。私の知り合いである占師の一人は、絶望的な窮地に立った者が身を捨てて行なう「ソイウェット」と言う妖術で攻撃を受けた。
- 56) 因みに、Toweett は、グシイ族からキプシギス族に編入された人々の主要な仕事の一つは鍛冶屋だったとしている(*op. cit.*, p.66)。また、Kenduiywa は、オレ・タンギレという。明らかにマサイ族出身とわかる名前の鍛冶師の短い伝記を記してい

る(1980, pp.27-28)。

- 57) 植民地初期の行政首長たちも、出身地に関係なく任地がきめられ、多くの場合自宅を遠く離れて勤務していた。
- 58) 小馬, 1982a, 150頁, 155頁, 1983b, 89頁。
- 59) 例えば、私の寓居の近くにあるンダナイ小学校で学校の備品が盗難にあったとき、生徒と全職員が校庭に集合して、正体のわからない犯人を呪詛した。犯人は、何時か必ず不幸な死に方をすると信じられている。
- 60) Peristiany, *op. cit.*, p.180.
- 61) 彼等も、新しいタイプの「異人」であり、イギリスの植民地政策のもつ価値や利益とキプシギス族の伝統文化がもつ価値や利益の媒介者であり、この意味で境界人であった。
- 62) Saltman, 1981.

# 参考文献

- 小馬 徹, 1982a. 「キプシギス族の『再受肉』観再考」『社会人類学年報』 弘文堂, 8: 149-160.
- , 1982b. 「ケニアのキプシギス族における女性自助組合運動の展開」『アフリカ研究』(22): 1-19.
- , 1983a. 「牛牧民カレンジン——部族形成と国民国家」『季刊民族学』(25): 32-45.
- , 1983b. 「災因としての死霊と妖術——キプシギス族の場合」『一橋論叢』90(5): 71-91.
- 長島信弘, 1981. 「呪詛と祝福——ケニア・テゾ族のイカマリニヤンクランを中心に」『一橋論叢』85(6): 1-18.
- Barton, J., 1923. Notes on the Kipsigis or Lumbwa tribe of Kenya colony. *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 53: 42-78.
- Chirchir-Chuma, K., 1975. Aspects of Nandi society and culture in the nineteenth century, *Kenya Historical Review*, 3(1), 85-95.
- Ellis, D., 1976. The Nandi protest of 1923 in the context of African resistance to colonial rule in Kenya. *The Journal of African History*, 17(4): 555-575.
- Evans-Pritchard, E. E., 1947. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*, Oxford.
- Gluckman, M., 1956. Political institution. In (E. E. Evans-Pritchard et al.) *The Institutions of Primitive Society*, pp. 66-80, Illinois. 吉田禎吾訳, 「未開人の政治」『人類学入門』弘文堂, pp. 124-144, 昭和45年.
- Gold, A. E., 1978. The Nandi in transition: Background to the Nandi resistance to the British 1895-1906. *Kenya Historical Review*, 6(1-2): 84-104.
- Hilders, J. H. and J. C. D. Lawrence, 1958. *An English-Ateso and Ateso-English Vocabulary*, Nairobi.

- Hollis, A. C., 1909. *The Nandi: Their Language and Folklore*, Oxford.
- Huntingford, J. W. B., 1953. *The Nandi of Kenya*, London.
- , 1969. *The Southern Nilo-Hamites*, (2nd ed. first published in 1953), London.
- Kenduiywa, P. T., 1980. *Achame Kutinyon Kararan Somanet*, Nairobi.
- Kipkorir, B. E., 1978. *People of the Rift Valley*, London.
- Komua, T., 1981. The dwelling and its symbolism among the Kipsigis. In (N. Nagashima, ed.) *Themes in Socio-Cultural Ideas and Behaviour among the Six Ethnic Groups of Kenya*, Tokyo.
- Korir, K. M., 1974. An outline biography of Simeon Kiplang'at arap Baliach, a 'Colonial African Chiefs' from Kipsigis. *Kenya Historical Reviews*, 2(2): 163–173.
- Lang'at, S. C., 1969. Some aspects of Kipsigis history before 1914. In (B. G. McIntosh, ed.) *Ngano*, pp. 73–94, Nairobi.
- Lienhardt, G., 1964. *Social Anthropology*, London. 増田義郎・長島信弘訳, 『社会人類学』岩波書店, 昭和42年.
- Magut, P. K., 1961. The rise and fall of the Nandi Orkoiyot c. 1850–1957. In (B. G. McIntosh, ed.), *Ngano*, pp. 94–108, Nairobi.
- Mair, L., 1962. *Primitive Government*, Harmondsworth.
- , 1969. *Anthropology and Social Change*, London.
- Manners, R. A., 1962. Land use, trade and growth of market economy in Kipsigis country. In (P. Bohannan and G. Dalton, eds.) *Markets in Africa*, pp. 493–517, Evanston.
- , 1967. The Kipsigis of Kenya: Culture change in a 'model' east African tribe. In (J. H. Steward, ed.) *Contemporary Changes in Traditional Societies*, 1. pp. 205–360, Urbana.
- Matson, A. T., 1970. Nandi traditions on raiding. In (B. E. Ogot, ed.) *Hadith* 2, pp. 61–78, Nairobi.
- , 1972a. Reflections on the growth of political consciousness in Nandi. In (B. E. Ogot, ed.) *Politics and Nationalism in Colonial Kenya*, pp. 18–45.
- , 1972b. *Nandi Resistance to British Rule*, Nairobi.
- Mokamba, D. et al., 1974. The Kisii-Kipsigis wars of the late nineteenth century. *Kenya Historical Review*, 2(2): 222–234.
- Ng'eny, K. N., 1970. Nandi resistance to the establishment of British administration 1893–1906. In (B. A. Ogot, ed.) *Hadith* 2, pp. 104–126.
- Ochieng', R. O., 1972. Colonial African chiefs—were they primarily self-seeking scoundrels? In (B. E. Ogot, ed.) *Politics and Nationalism in Colonial Kenya*, pp. 46–70, Nairobi.
- , 1974. *A Pre-colonial History of Western Kenya c. A.D. 1500–1914*, Nairobi.
- Orchardson, I. Q., 1931. Some traits of the Kipsigis in relation to the contact with Europeans. *Africa*, IV: 466–474.
- , 1961. *The Kipsigis*, Nairobi.
- Peristiany, J. G., 1939. *Social Institutions of the Kipsigis*, London.
- , 1956. Law. In (E. E. Evans-Pritchard et al.) *The Institutions of Primitive Society*, pp. 39–49, Illinois.
- Saltman, M., 1977. *The Kipsigis: A Case Study in Changing Customary Law*, Cambridge, Massachusetts.
- Snell, G. S., 1954. *Nandi Customary Law*, Nairobi.
- Toweett, T., 1979. *Oral (traditional) History of the Kipsigis*, Nairobi.
- Waller, R., 1976. The Maasai and the British 1895–1905: The origins of an alliance. *The Journal of African History*, 17(4): 529–553.